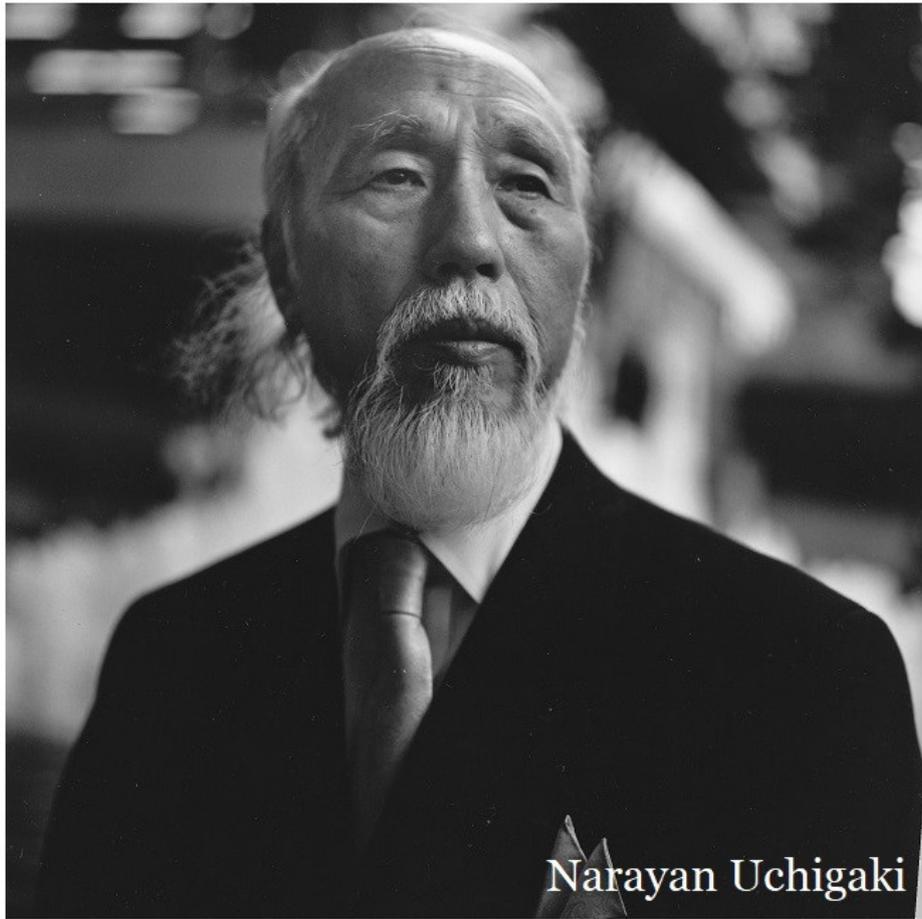


KALPATARU カルパタル

ナーラーヤン内垣 講話録 NO. 106

ハイデッガー哲学と私の歩み



Narayan Uchigaki

目次

目次	
目次	3
1. 歴史とは 明るいもの	
1. 歴史とは 明るいもの	7
2. 空間はすべてのものの故郷の入口	
2. 空間はすべてのものの故郷の入口	13
3. 存在生命との語らいから 光速にとび乗る	
3. 存在生命との語らいから 光速にとび乗る	19
ナーラーヤン内垣について	
ナーラーヤン内垣	25
奥付	
奥付	29

目次

目次

ハイデッガー哲学と私の歩み

1. 歴史とは明るいもの
2. 空間はすべてのものの故郷の入口
3. 存在生命との語りから 光速にとび乗る

ナーラーヤン内垣について

1. 歴史とは 明るいもの

1. 歴史とは 明るいもの

今日は1984年1月6日です。今から、ハイデッガー哲学に入れるような入口を話していきます。神戸の甲東園というところに、ハイデッガー哲学の研究者で、大江精志郎という偉い人がおられます。もう、そうとうなお年ですが、私がまだ青年だった頃、その方にご縁があって、ハイデッガー哲学にふれさせていただいたわけです。一番初めに友人につれられて私が大江先生のお宅を訪問したとき、大江先生は私に「ハイデッガー哲学を私はやっています。あなたはヴェーダーンタ哲学をやってるんですね。」「ところで、ヴェーダーンタ哲学とはどんなのですか」と言われました。まだ私も若かったので、ヴェーダーンタ哲学をやっている、いっぺんでまとまったことを言えませんでした。まあ、そういうようなことから入って行って、ハイデッガー哲学の入口にふれていったのです。

大江先生は「この宇宙ができたのには、歴史がありますね」と言われた。なるほど、歴史があります。いつかずっと昔に、この宇宙はできたわけですから、当然、過去、つまり今日までのできた時間というものがあります。「歴史というものは、明るいものですね」続けてこう言われた。そのとき私が考えていた明るさといったら、光が明るいとか暗いとか考えていなかったんでしょね。「歴史って明るいですね」と言われたとき、とっさにはどういうことかわからなかったんです。今考えるといっぺんにわかるんですけど、そのとき初めにピシッとわからなかったから、わからないままに半時間か1時間、大江先生の話聞いていました。しかし、初めにわからなかったことが、自分には問題だったんです。そこで、その初めに言われた1つのことを家に帰ってから考えたのです。

歴史って明るいですね。宇宙がここにいます。いつかできたんでしょね。できたという時間的な流れ、それを見ても明るいです。歴史、これは明るいものです、ともういっぺん自分でいかえしたわけです。すると、いっぺんにわかったんです、明るさが。まあ、例えば子供がいて親がいる、親が子を産んだ、明るさがありますねえ。憎くて子供を産んだということはないでしょう。宗教的にいうと愛情とかね。しかし、愛情といってしまうともう哲学と違うから、そういう言葉を用いずにいったら、やっぱり明るさがありますね。子供の口へ食べ物を入れてやる、これも明るいですねえ。大江先生が言われた明るさということがわかるわけです。宇宙がいつか大昔にできあがったわけ

です。そのできあがった過程とか、今日までの歴史、明るいものがありますねえ、と自分でつぶやいたらわかってきたのです。

歴史って明るいものがありますね、ということになりますと、時間って明るいものがありますね、といっても通るわけです。歴史的な時間ですね。明るいものがありますねというように、これを明るさに置きかえて表現してくれたのです。それはハイデッガーの哲学かどうかはわからなかったけれど、大江先生はそう言われたんです。

このようにしてハイデッガー哲学の入口を、少し教えて下さったわけです。そこからいっぺんにヴェーダーンタの方へひっついてしまったんです。ヴェーダーンタの方では宗教的にいってますね。宇宙の根源をブラフマンと名づけて、それは大昔から、宇宙ができる以前からあるもので「始めもない、終わりもないもの」だと。始めもない、終わりもない、なにかおかしな存在ですが、ヴェーダーンタ哲学ではそういうものがある、といっているわけなんです。それで、その双方でいわれていることを考えてみますと、それは生きてある、という言葉で置きかえられるわけです。死んであるのとは違うわけです。明るい歴史があるということは、生きてあるわけです。死んであったらそんな動きというものはないですね。そういう簡単なとらえ方で、生きてある、と私がうけとったのです。

そうしますと、存在しているもののすべてが、その生きてあるものの基盤の上に立っているということになります。すると、その根源的なものはすべての親玉だ、ということになりますね。いいかえしますと、明るさの親玉であり、生きてあるもとの親玉だといえます。しかもそれは、死ぬとか生きるといったようなことと違う、生きてあるものなのです。そして、それが「ある」限りにおいてはエネルギーがあるように、脈うっているととらえられます。ハイデッガーはそれを「存在」と名づけたのです。その生きてある親玉である存在に、意識を向けただけでふるえてきます。一種の電氣的なショックをうけるわけです。

こういうような入り方で、ハイデッガー哲学に入っていったのです。ヴェーダーンタ哲学ではブラフマンとは、生きてあるとか、死んであるとか、またはエネルギーがあるとはいわないで、それは「始めもなく、終わりもない」といっています。それはそれで納得はいくんですが、それではどんなものかということになると「そんなものと違う。いや、そんなものでもない。否、否、否・・・」とすべての考えたことをうち切って、人間がそれに近づくための言葉、考えを、全部、否定しているわけです。否定されてしまうと、入っていけませんね。しかしハイデッガー流にいくと、そういうものと違うではあろうけれども、生きてあるとか、明るいというように、入っていきやすいわけです。

こういうものかという、いやそれと違う、お前の言っていることは全部違う、というように否定してしまうから、ヴェーダーンタ哲学ではとりつきようがない。禅宗なんかもそういうきらいがありますよね。否、否、否、お前の考えはみな違うというようにね。そういうふうに、ヴェーダーンタ哲学にしても、否、否、否、でやられるから、ごまかされているような状態です。だからそれ以上の進歩というものがなかったわけです。ところが、ハイデッガーだったら、歴史というものは明るい。すると根源というものは明るさの根源であるというように、すべては明るいという中で想定して入っていきけるわけです。明るいといっても、人間が考えるような明るさとは違うだろうけれども、暗いものとは違う、ということがわかるわけです。こんな電燈の明るさ、暗さなどということと違って。まあ、明るさを感じさせるようなものなのでしょうね。

そのように、ヴェーダーンタ哲学では、否、否、否、で近づいていけなかったものが、はしごだんを上がるように、ハイデッガー哲学では登っていきけるわけです。明るさの根源であるとか、生きてあるものだとか生きてあるものの親玉であるとかいえば、そこへ近づいていきけるのですね。それはやっぱり、ヴェーダーンタ哲学の恩恵ですね。近づいていきけるはしごだんがあったわけです。それが明るさであるとか、生きてあるとか、脈うっている、というような状態を自分にわからせてくれたんです。それが非常に良かったですね。ヴェーダーンタ哲学とハイデッガー哲学が私の中でうまく交りあって、互いの欠点をうめあったともいえます。このようにしてハイデッガー哲学からうけた恩恵というものは、大きいものだったわけです。さて、そこから話をもう少し奥にすすめます。

2. 空間はすべてのものの故郷の入口

2. 空間はすべてのものの故郷の入口

今までの話は、ブラフマンとか根源というものは明るいとか、生きてあるとか、自分たちの足場としては入っていきやすい足場でした。もちろん、そんな安っぽいものではないでしょうけれどね。しかし、宗教的に愛とか慈悲とかいわれると、もう、とっぴょうしもない方向へひっぱられてしまうんです。宗教はときどき、愛とか慈悲とか、そういうような山師的なことをいいます。そういう宗教的な用語を使わずに、明るさがあるとか、生きてあるという、そういう表現というのはおもしろいですね。そういう言葉で表現するというのはたいしたことです。

さて、その次はどういうことを聞いて欲しいかというと、私が自分で勉強しながら考えた、分かりやすい考え方というのがあるのです。それは、ここに湯のみがありますね。湯のみがここに「ある」ということは宇宙がここに「ある」とか、星がここに「ある」ということと同じですね。ここに湯のみが1つ「ある」ということと、ここに宇宙が1つ「ある」ということを研究するのは同じです。そこで考えました。湯のみがここにあるということは、一体なんなんだろう？ それはそこに湯のみを存在させるだけの空間があるから、湯のみをそこに置けたわけです。ここに「空間」という言葉が現れたのです。ハイデッガー哲学の中に空間があったかどうかはわかりませんが、自分はこう押しすすめて自分をまとめていったわけです。

(湯のみがここにある。あるということは、存在物が存在しているということである。存在物が存在しているということは、存在物を存在させるだけの基盤である空間がある。) ということで、空間ということが問題になったのです。例えば、自動車を駐車場に入れられるということは、その自動車を入れるだけの空間があるということです。空間があるから、存在事物が存在し得るのであるということがいえます。そこから存在生命論に入るわけです。

そうすると、この空間というのは一体なんなのか。ものを置かすだけの働きがあるわけです。働きがあるということは、生きてある、ということがいえるわけです。働きがあるということは、働きがないということと違う。働きがないといえば、死んであるとか、閉鎖されてあるとか、そういう表現でも考えられますが、この湯のみがここに置けると

いうことは、開かれてあるわけです。開かれてあるということは、働きがあるわけです。ものを置かすだけの働きがあるんです。そこです。そこで、その生きて働いているものを、自分の中で生きてつかまえることができたんです。これはハイデッガーもそうしてひつつかまえたであろうし、私は宗教方面でそんなものをとらえる神経ができていましたから、それをひつつかまえることが容易だったわけです。

この空間というのは開かれてある。それで湯のみが存在しえた。それと同じように、宇宙という存在事物がここに存在しているということは、その宇宙を存在さすだけの空間がここにあったわけです。なければ宇宙は存在しえないわけです。というふうに、母胎に空間があるんですね。空間が母胎なんです。このように空間というものが見つけられ、さらに空間が生きているとわかったわけです。アインシュタインが空間を運動の場に登場させたように、私は空間を脈うって開き、かつ生きてあるものとして登場させたわけです。そうなったらもう空間の中へ、どんどん入っていけるわけです。

存在事物が存在しうるということは、存在事物を存在させるだけの開かれた空間があるということです。空間が母胎になっている。そして、それが脈うち、生き、開いている。開き、それは待っているということです。このように開き、待っているものがあるということは、ありがたいですね。こちらがもう脈うってくる、いきいきしてくる。

そのいきいきした「空間」が根源、即ち、すべてのものの故郷の入口であるかもしれないですね。今日読んだ入っての解説したヘルダーリンの詩にあるように、故郷という意味がはっきりしてきます。「帰郷」故郷へ帰るといいますが、我々にとって大切なことなんです。ハイデッガーはよく故郷に帰ると言います。これはヴェーダーンタ哲学と同じです。しかし、ここに「空間論」が登場したことはすばらしいです。我々はいま、空間という故郷の扉を開けたんです。ちょうど魚が水を得たようなものです。魚は泳ぎますね。泳いでいるうちに、そのお水の青さとか、温度とか、自由さを徐々にみつけるように、私のその空間の中で泳ぐことが始まったのです。

ところが、私がズーッと書いた詩の中にもありますが、その故郷へ帰るのは、故郷を見つけても帰れなかったのです。故郷がそこにある。その故郷の臭いとか、音とか、脈はくを聞いたわけです。しかし、聞いたけれど、その脈はくの中に入れないのです。そうなれない、その苦しきで、何年間かもだえたわけです。そういうときの詩があります。「家をとび出した男がいた。彼は自分のもとの家へもどってきた。もどってきてドアをコンコンとノックしたが誰もいないし、その扉も開いてくれない。確かに自分が住んでいた家でありながら、その家の鍵がさびついていて開かない。」というように、自分の苦しかった当時のことが書かれています。

自分は故郷を長く留守にしていたので、鍵がさびついていて開かない。コンコンとノックしても、戸を揺さぶっても、扉は開いてくれなかったというわけです。それでその扉の前に座った青年は、泣きおとしにかかったというのです。必死だったんですね。そしてそれを開けたのが光速瞑想だったのです。ついに人類未踏の「光速瞑想」をみつけ出したわけです。

結局、宗教や哲学でギリギリのところまでいっても、やはり科学的に入っていないと、その故郷の扉は開いてくれないのです。しかしそれにいきつくまでには、ハイデッガー哲学の存在生命論が大いに助けとなったわけです。それは、いくら意識を光速でとばすといっても、光速そのものの乗り物にとび乗るには、ものすごいスピードと、その光速という生きたもの（光速がもつその存在生命）にひっつかなければ、光速の乗り物にとび乗ることができないのです。こうなってきますと、私が光速で宇宙をとび、星の歴史の彼方にある根源にぶつかることができたのは、やはり、ハイデッガーの「存在生命論」のおかげなのです。そこで次はその存在生命論について、詳しく説明していきます。

3. 存在生命との語りから 光速にとび乗る

3. 存在生命との語らいから 光速にとび乗る

ずっと昔、私がカナリヤを飼っていたことがあります。そのカナリヤがある夜のこと夢にあらわれてきて、こう言うのです。「明日、たまごをうむよ」と。そこで私は朝一番に鳥の巣を見にいったのです。するとたまごが一コ、ポトンと産んであるんですね。小鳥がきて言うんです、明日たまごを産むからって。そんなのおもしろいですね。

小鳥なんか、まあ生きていますからね、通じやすいし。お花も、植物として生きてあるから、通じやすいですけどね。湯のみだとか、そんなようなものになってくると、生きたような状態って、あまり感じられないですね。または絵に画いた虫とかは、生きてある、とはなかなか感じられないですね。けれども、そういう生きたとか死んだとかいう生物生命、そんなことを通りこして、存在生命というものの中でグウーツと自分の意識を動かし始めたら、そういうおもしろい世界がみえてくるわけです。そういう神経で、そういうような物の見方で、そういうふうな如実に生きた線を自分はもちながら、物理の世界へ入っていけるわけです。

時間の世界とか、空間の世界とかに入っていくと、本当に生きて、ピンピンね。時間なら時間がビビビーツと動いて生きているような時間がもしあったとしたら、それに触れられるわけです。もし空間があって、その空間がビリビリーツと生きてあったとしたら、そういうものに触れられるわけです。物理学の世界でも、そういう存在生命にふれる神経がないとね。ただ電子がそこにある、というような感覚的な世界と違ってもっと奥の、生きてある物理学の世界に入れられないわけです。如実に生きてある、生きてあったら、あっちからまた教えてくれるわけです。

そういう点、ニュートンにしても、アインシュタインにしても、やっぱりその世界と語らいをしていたことがよくわかります。語らいをしていなかったら、自然というのは秘密を明かさないですね。自然というのは人に自分の内奥を開けないですね。開けてもいような人に開けます。アインシュタインというのはそういうやわらかい語らいをもって、自然の中に入っていったんでしょうね。話が語らいというところにいきましたね。

語らいかけはそのものと語らうんですから、あっちもこっちに何か言ってくれます。この湯のみに「元気か」なんて言っても、何の反応もありません。ないけれども何かやっぱり言っているんです。「元気、元気」と言っているのかもわかりませんし、「お前も元気か」と言っているのかもわかりません。しかし、聞こえてはきませんよね。聞こえてはきませんが、元気かと言ったら、元気だと言っているような気がしてくるんです。これは自分で創っているのかもわかりません。創っていてもかまわないのです。糸車の糸をこう引っばっているようにね。そのうち本物があらわれてくるわけです。

波動の世界というのはね、にかよった波動を自分でこしらえていくとそんなものが聞こえてくるのです。全く疑っていたり、また違う状態でいたらだめですね。例えば、穴に入っている狸をこん棒で追い出そうとしても、なかなか出てはこないですけど、狸のような気持ちになって入っていったら、狸もこっちへくるかもわからないですね。そんな意味で、湯のみと話をして「おい、元気かい」と言ったら「元気だ」という反応を自分でこしらえた方がいいですね。そういう語らいをすると、糸車の糸をひっぱってたぐっているように、本当の波動、心の波動というんですか、存在生命がもっている、その生きたものが語らってくれるわけです。

仏像を生きていると言ったら、その仏像が喜んでこちらに姿をあらわして、ちょっとでも神秘の扉を開いてくれたように、同調するような波動を自分でつくっていくと、だんだんそれがあらわれてくるんですね。まあ、さそい水ですね。ガツチャンガツチャンという昔のポンプに、スカッスカッといって水が上がってこないときには、さそい水というのがいますね。バケツいっぱいビューッと入れてガチャガチャとすると、水がビューッと出てくる。さそい水が必要なんです。

だから「おい、元気か」と言ったら「元気です」と言って、いなくても言っているように、自分でこしらえるんですね。語らいですね。語らってくると、だんだんその声がか聞こえてくるのです。こんな遊びというか、遊戯とか、そんな訓練は必要ですね。こういうことは、やらないといけないんです。聞いて「ああ、おもしろいなあ。そんなこともありうるだろうな。けれど、そんなことをしている暇はない。」なんて言っていたら、もう、一生入れないですね。聞いただけでなく、やっぱりやらないとね。こんなことをやったら愉快だと思いますね。

いっぺんでもやってみようかということで、いっぺんぐらいやるかもしれませんが、しかし、何も聞こえてこなかったら、しまいには止めてしまって、先生の言ったことはウソだ、ということになりますね。まあ、そんなことはいいですが、気長くやっていると、そのうち湯のみがしゃべったり、テープレコーダーがしゃべったり、電気の傘がしゃべっ

たりすることがいっぺんでもあるかも知れません。まあ、話をもうひとつ横へずらしましょう。

私がおね、南無妙法蓮華經を一生懸命やっていた折に、ハエがブンブンと空中を飛んでいても、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經って聞こえるんです。これは間違っって聞いているのとは違うんですよ。本当なんです。私ばかりではないんです。そういう関係者はそんなふうにも聞こえるんです。ハエがブルブルブルツといても、本当にそのハエが南無妙法蓮華經の音を出してるわけなんです。それはいつも自分の南無妙法蓮華經という波動の中に入っているから、それに同調して同じ波動を出しているのがわかるわけです。

もうひとつ事例を言うと、私がアメリカにいたとき、日本からの郵便物が、今日は誰その郵便物が入っている、というのがいっぺんにわかるんです。というのは、その人の声が聞こえてくるんです。郵便物の中に、書いたその人の心がちゃんと入っているわけです。えらいものですね。今日はAさんの声が聞こえたから、Aさんが入っているだろうと思うと、百発百中入っている。あるとき、Aさんの声も聞こえてくるし、またBさんの声も聞こえてきた。二人の音が聞こえてくるのでどっちかなあ、と思っっていつてみたら、二人の手紙が入っていました。アハハ、そんなのおもしろいんですね。これは現実の問題です。だから湯のみが震動を送って何か言っっている声も、聞こえる可能性があるわけです。まあ言ええば、そういう世界へ入れると、大分、奥へ入っっています。

事実、こういうことがちょっとでも経験されないと、物理学へいくら入っってもだめでしょうね。表面で終わります。あちらが語らいかけてくれないと、こちらも語らいながら、その中へ許しを得て入っていかないと閉ざされた世界、不思議な世界、人間には見せない世界、すなわち神秘の世界というのがあるわけです。

例えば悪人がいっばいいてね、そこにもものすごい秘密があらわれたら大変なことが起きますね。そのように、神秘というのはなかなか扉を開けないのです。いい人間でないと、また時代がよくなないと、神秘の扉を開けないのです。

そのように、神秘の扉というのは必要に応じて、ある人を通じてあけるわけです。物理学の世界は非常に重大なポイントをもっているのだから、よけいにこういう本当の声を聞く態度で物理の世界へ入らないといけないうですね。宗教家もむろんそうですが、とくに物理学者がもって欲しいですね。大分わかってきましたね、入っていき方が。やっぱり、この歩みを実際知っって経験してこないと、私の世界へ入ってこれないです。

そこで、いっぺんにまた話を横へ飛ばしますけれど、光速の問題に入ります。光速瞑想というのを私が始めていますが、いつも言うおもしろい話があるんです。ある人が私のところにきて「先生、私、沖縄へ行って、三ヶ月星を見ていました。毎晩、毎晩、見ていましたけど、ピュアーにぶつからなかった。」と言うんです。ぶつかるはずないです。私のやり方と違うのですから。ただ見ているだけではだめですね。それは、目で星の光をとらえているだけです。私のは、とらえているんですね。星の光をひつつかまえるのと見ているのとは、違うんです。光速でとんでいる星の光を、パッとひつつかまえることができるんですね。できるし、またそうしなければ、効果がないんです。ピシャッとひつつかまえるわけです。ものすごい速さで飛んでいるやつに乗られるわけです。それをひつつかまえられるんですね。普通の人そんなひつつかまえる早業というのはないわけです。ただ見ているだけです。

走っている急行列車を見ているのと、急行列車にバァッと飛び乗るのと違いますね。それだけの相違があるわけです。見ているだけだったら、その急行列車の中味がわからないですね。急行列車が走ったというだけでね。私の場合は、それにとび乗るわけです。それは今言ったように、目に見えないものに飛び乗る訓練をしているでしょう。存在生命なんて目に見えないけど、それにピシャッとひつつく。ひつついて、それと語らったりする訓練ができているから、ピシャッとひつつけるんです。だから星を見て、星の光と、その距離に乗れるんです。だから光の速さに距離をかけることができるわけです。それはハイデッガー哲学の存在生命論で訓練したのが役立つわけです。インドのヴェーダーンタ哲学だけではだめなんです。

インドのヴェーダーンタでは、哲学的に考えて根源に到達するのだとか、あるいは神を熱烈に礼拝し、そのお功德によって根源にたどりつくのだとか言っていますが、そんなことではどうしようもないのです。この宇宙というものは、歴史的な時間を経て現れてきているのですから、その根源にたどりつこうと思えば、やはり、歴史を時間的にカムバックしていかなければならないのです。問題は時間にかかっています。そこで私は、星の光の速さと、星のもっているものすごい距離をかけたら、ものすごい速さで時間をカムバックしていけるであろう。そして、必ず<始まり>に到達できるであろう、と自分の頭で計算したわけです。そしたら計算した通りに、カムバックしてあったんです。二ヶ月くらいのうちに、根源にボカーンとぶつかったわけです。

という話です。すると大体わかりますね。ずーっと始めからの歩みがおもしろいですね。歩み方が、如実に生きてありますものね。

ナーラーヤン内垣について

ナーラーヤン内垣

<http://vedanta.sub.jp/>（ナーラーヤン内垣公式サイト）

ナーラーヤン内垣は哲学・宗教・神話学の研究者であり詩人である。大阪高槻市に本拠を置き、アメリカのカリフォルニア州に2ヶ所の拠点を持つ。インドにおいては、6ヶ所の文化交流センターを設置。医療活動と職業訓練活動を行う。バングラデッシュでは、戦災孤児と戦災未亡人のための母子寮を設立。教育、衣食住を与える。アメリカでは哲学者の記念式典などを行う。哲学・神話学を通し、文化・人種・宗教を超えて社会秩序の維持の必要性を説く。

A w a r d

1995年日本文化振興会より、社会文化功労賞を受賞

1997年ケンジントン大学より哲学博士号を授与される

1998年国際アカデミー教育より Fellow のタイトルを授与される

1998年 国連ユニセフとユネスコより世界平和賞を受賞

2007年 アメリカ大統領より大統領最優秀賞 金賞を受賞

プロフィール

1924年、和歌山市の金光教の教会で生まれる。28歳のころ、ラーマクリシュナのヒンズー思想に出会う。その時生まれた詩情あふれる名著「仏陀再誕」の出版をきっかけに、日本における実践ヴェーダ運動の創始者としての活動が始まる。

1957年、ラーマクリシュナ・ヴィーヴェーカーナンダ学園（日本ヴェーダソサイティの前身）を創立し終身会長となる。生涯を「人類はどうしたら救われるか」の探求と実践に捧げ、世界を舞台に活躍する。

バングラデッシュでは、戦災孤児と戦災未亡人のための約百人収容できる母子寮を設立し衣食住と教育を与える。インドにおいては、7年間に渡り6箇所の文化交流センターを設置し、賤民部落において、奉仕による医療活動と、職業訓練活動を行う。

インド滞在中の1974年、宇宙的存在との合一を体験する。この時編み出された光速瞑想は、宇宙合一の方法として大変ユニークなものである。その後思想の展開は「神話実現」に向けて、人間の真実への比類のない迫りを見せている。

アメリカでは、広い荒地を少数の弟子とともに、自らがつるはしをふって開墾し、美しい日本庭園を創りながら、著作活動、その他文化交流に励んでいる。アメリカカリフォルニア在。

2012年8月逝去。

著書17冊（英訳本も有）

奥付

奥付

カルパタル No. 106 「ハイデッガー哲学と私の歩み」(1984年1月6日)

著者：ナーラーヤン内垣

著者プロフィール：

感想はこちらのコメントへ

電子書籍プラットフォーム：パブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

カルパタル No.106 「ハイデッガー哲学と私の歩み」

著 ナーラーヤン内垣

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
